

【研究者】

石川亮太

(助成決定時) 佐賀大学 経済学部 講師

【研究題目】

19世紀末～20世紀初頭の朝鮮開港場における華商の商業活動について

- 「同順泰」経営資料の分析を中心に

【研究の目的】

本研究の目的は、朝鮮開港期(1876～1910)年の開港場華商(中国人商人)の活動を、広域的な華商ネットワークの一環という視点から明らかにすることである。この時期の朝鮮・清朝間の関係は、清朝が「宗属関係の実質化」を図って積極的な介入政策を取った時期とされ、中国人商人の活動も清朝の政策的庇護の下で活発化したものと解釈されてきた。しかしながら同時期の東アジア市場では全体的に華商の活動が活発化していたのであり、その商業活動のあり方は行政的領域を越えた広域的な取引ネットワークの形成によって特徴付けられていた。本研究では朝鮮華商もそうしたネットワークの上に連なっていたことを実証し、あわせてそうしたネットワークのあり方を規定した外的な諸条件を検討することによって、東アジア地域史全体の中で朝鮮開港の歴史的意義を論じようとした。

【研究の内容・方法】

本研究の中心的資料は、ソウル大学附属奎章閣に所蔵される「同順泰資料」である。本資料は、1880年代から1920年代にかけてソウルとその外港仁川を中心に活動した、広東省出身の貿易商同順泰が残した経営資料である。分量(30冊)は必ずしも多いとはいえないが、同時期の朝鮮華商の経営資料としては類例がなく、従来の研究が主に第三者の観察記録に依存してきたことに鑑みれば、本資料の重要さは疑いがない。

にもかかわらず本資料は従来ほとんど利用されることがないために、本研究ではその性格に関する基礎的な分析から着手した。その結果本資料は、1889年から1905年にかけて、ソウルの同順泰本店に宛てて朝鮮内の同順泰分号や中国・日本の取引先華商が発信した商業書簡と送り状・仕切書などの取引計算書類によって主に構成されていることが判明した。その残存状態は年度によっては極めて良好で、それらの分析によって同順泰の取引内容がほぼ網羅的に明らかになるものと判断された。

このような結果を受け、如上の本研究の目的から、特にその海外取引について更に検討を重ねることとし、取引先網の分布状況と同定、取引・決済方法について分析を進めた。それによれば同順泰は、店主(譚傑生)の姻戚かつ同郷出身者にあたる有力な上海商人の出資を受けて朝鮮に進出し、貿易も主にはその出資者との間で行われた。とはいえ取引網は上海以外にも東アジア全体に広がっており、特に日本の長崎・神戸・横浜との関係が密であった。

これらの取引先との貿易額自体は必ずしも多くはなかったが、当時の朝鮮開港場における対外貿易上のサービス（定期航路や貿易金融など）がほとんど日本企業によって対日貿易を志向して構築されている状況下において、同順泰の対上海貿易を迂回的に支援するという意味で、それら日本の開港場華商との関係は重要であった。なおそれらの取引先華商も店主と血縁ないし同郷関係にあることがほとんどであった。

【結論・考察】

本研究では、ソウル大学所蔵同順泰資料を利用した事例分析を通じて、朝鮮開港後に開港場に進出した華商が、個人的な地縁・血縁関係と重なる形で、行政領域を越えた取引先ネットワークを構築していたことが明らかになった。そのような活動の形態はこの時期の中国人商人に一般に見られるものであり、かつ近代的な貿易関連サービスが限定的にしか提供されていなかった同時期の朝鮮開港場で中国との貿易活動を行うためには、商人自身の個人的関係に依拠した広域的な取引先ネットワークを持つことは不可欠でもあった。本研究で得られた如上の知見を踏まえ、今後の課題としては、20世紀に入り日本を中心とした東アジアの新たな分業構造が創出され、それに沿った形で貿易関連サービスの整備が進む中で、上述のような華商ネットワークが如何に対応したかという点を挙げておきたい。そのような視角からの検討はさらに、華商ネットワークによって支えられた東アジア市場の環境を、日本が如何にして自国の工業化に適合的なあり方に組み替えて行ったかという、日本工業化の歴史的特質にかかわる問いにもつながるものと考えられる。